昭和60年(1985年)9月10日　教皇様の聲　(昭和59年10月1日第三種郵便物認可)
9　SEPTEMBER, 1985　毎月10日発行　第65号

教皇様の聲

信仰と道徳

シリーズⅣ

Libreria Editrice Vaticana, Città del Vaticanoの転載許可済
©1985 精道教育促進協会 ☎(芦屋)三二・三四五二 芦屋市船戸町12―6

1　私たちは、カテケージス(要理教育)が教会の働きの一つであることを思い起こしました。その教会は、世界中に福音を広め、キリストの秘義をよりよく知ることによって秘跡の生活を深めようと努力しています。

教会は、すべての福音宣教と同様、カテケージス(要理教育)を通して人間のもっとも主要な疑問に返答するのだということを認識しています。ここで人間のもっとも主要な疑問とは、各人がすでにたずねたことがあるか、あるいは、人生を歩むうちにいつかはたずねることになる疑問のことです。人間はどこから来たのだろう。どうして私は存在しているのか。神と私の、そして霊界と私の関係はどのようなものなのか。人生の目的を達成するためには、どのように振舞わなければならないのだろう。なぜ私は苦しみと死を免れないのか。そして私の希望とは何だろう。

このような疑問に、カテケージスは神の返答をもたらします。カテケージスとは、単に一個人の研究の産物ではなく、神の啓示を通して人類に伝えられた真理を理解させることなのです。ですから救いの真理を伝えるにあたり、カテケージスは、人の心に生じる主要な疑問を明らかにし、人間のもっとも大きな期待を越える真理と生命の贈り物をもって、神が啓示の中で、それらの疑問にどのようにお答えになったかを示すことに関係しています。(コリント①2・6～9参照)　その役割は、啓示の権威に基づいた確信を与えることです。

内容のもとのままの状態

2　それゆえカテケージスは、数々の疑問を熟考することによって疑念や混乱を引き起こすのではなく、理知を啓発し、しっかりとした確信でそれを強めるのに役立ちます。確かにカテケージスは用意した答えで、人間の魂をより深く啓示の秘義へと導き入れますが、この秘義は、この世での生活の間すべての影を追い払うことはできないにしても、心に光明を与えてくれます。私たちは何もかも理解できるというわけではありません。けれども主要な真理と生命の意味を指摘するのに十分なだけのことは理解できるのです。

一連の質疑応答というカトリック要理の形式は、しばしばカテケージスの根本的な構造を具体的、実際的に示していますが、それは人間の疑問と神の返答との出会い、と定義づけることができます。人間の疑問が神の啓示によって導かれ、すでに神の恩寵によって啓発されており、一方、神の返答は人間の言語の限界と不完全さの中で作り出されているということはたしかです。けれどもそれは、本当に人間に固有の疑問であり、それらの疑問に対して、カテケージスが神の光をもたらすのです。

このことは、問題の人間的な面に注意を向けているとはいっても、カテケージスが人間の性格の熟考や、哲学・心理学・社会学的な研究、単に啓示の端を開くための努力だけに限られているのではないことを意味しています。カテケージスによって啓示された真理を人々に明細に説き、理解させなければなりませんが、真理の内容を減じたり薄めたりすることはできません。カテケージスはその教えを受ける人々の能力に合わせはしますが、神ご自身が人間に伝えたいと望まれた真理の一部をおおい隠す権利などもっていないのです。

信仰の問題

3　ここで、私が『要理指導に関する使徒勧告』の中でカテケージス(要理教育)の内容のもとのままの状態に関して強調したことを思い起こしてみることは価値があります。「実際、キリストの弟子となるものは、その信仰の服従が完全であるためには、『信仰のことば』を、そこなわれず、歪められず、弱められないで、本来の厳しさと力に満ちた完全なものとして受ける権利をもっている。それで、ある問題でメッセージの完全性を傷つけることは要理教育そのものを無価値にし、キリストと教会が当然そこから期待できる成果を危くするのと同じである。」(『教皇様の声』no.10参照)

このメッセージがむずかしくて、理解されにくく、受け入れられにくいことはよくわかっています。世界には福音の教えと相反する考えが多く流布しており、教会の名において教えられるもののすべてに反対の態度を維持する人もいます。カテケージスに自らを捧げている人は、そのような抵抗を前に、キリストのメッセージのすべての真理、人生に対するすべての要求を明細に説くのではなく、譲歩して、もっと受け入れやすいいくつかの点だけを伝えようという誘惑にかられるかもしれません。要理教育をする人が、自らの力量を越える教えを託されていることを思い出さなければならないのはその時です。受けとったままにその教えを示すよう努力しなければなりません。カテケージス(要理教育)というつとめを果たすにあたり、自らの信仰を伝えるのに必要な神の力を受けていること、また、忠実に教えを聞く人の中で聖霊が働き、教えを表現する聞き手の心に浸透させてくださることを、とくにしっかりと認識していなければなりません。

カテケージスの役割

4　カテケージスの問題は、信仰の問題です。教会の始めのころ、イエズスの数少ない弟子たちがすべての人間に福音を宣教し、要理教育を与えうると思った人がいるでしょうか。ところが、それが実現したのです。キリストのメッセージは、初めから、多くの人々の精神に浸透しました。当時、そしてそれ以後何世紀にもわたって恩寵がなしとげたことを、今日でも恩寵はなしとげ続けています。

ですからカテケージスは、信仰という完全な贈り物を子供たちや大人に伝えるのに、恩寵の力を頼りにしています。カテキスタは皆、キリストのメッセージ全体を伝える義務をもっており、キリストご自身から、この使命を完全に遂行するための能力を受けているのです。

(一九八五・一・九)

愛の賜の特別の証人
シスター方へ

1　司祭の崇高で厳しい務めは罪人を神に和解させることですが、それは同時にご聖体の聖務を完成させることにもなります。シスター方の召しだしは秘跡を授けることではありません。けれども大勢の人々が秘跡に近づくために準備をするという点で、大切な役目を果たしておられます。

　私は信徒の方々全員に、自らの信仰を周囲の人々に示すという預言的、王的使命について何度も思い出していただきました。(…) 活動生活を営むシスター方の場合、洗礼を受けているという事実から見ても、とくに信仰をまわりの人々に示すという役割を負っておいでになる。みなさん方は教会にとって強力な力となっておられます。教会はみなさん方が司祭の司牧活動を補い、支え、また、教育、医療、社会事業に精を出し、要理教育をはじめ、様々の組織の助け手となってくださることを期待しています。使徒的活動の範囲と種類は数限りないと言えますが、みなさん方はいつどこでも、喜んで能力を発揮してくださっています。

2　とは言え、以上のような仕事がみなさん方シスターの根本的なあり方を示すわけではありません。みなさんの修道生活は、なににもまして、神に奉献された生活です。そして、その奉献のしるしこそ、無私の愛である、と私は考えています。シスター方は、世界にとって、愛の賜の特別の証人であります。また、まぎれもなくこの働きこそ、みなさん方が社会に役立つかいなかということ以上に、神が世界のためを思い、お望みの点なのです。教会がみなさんに期待するのもこの点です。有益で効果ある仕事ができるかいなかを考えるより以前に、まず愛の賜の証人としてのみなさんの働きを望んでいるのです。

　みなさんが受け、修道会が認めた召しだしは神の愛の無償の賜です。あなたの姉妹たちや友人でなくあなたが召されたのはなぜでしょうか。マリアは神様の自由な選びを受けました。ベルナデッタも主の使信を伝えるために選ばれた人でした。みなさんは、これらの人々と同じように、召しだしという素晴らしい賜をお与えになった神に充分に感謝の心を示しているでしょうか。

　シスター方の主に対する応答も同じく自由でなければなりません。花婿であるキリストに自らの一生をささげるみなさんは、主ご自身が愛を受けるにふさわしい方であることを示してくださっています。キリストによると神の国は一見したところ〈愚か〉に見える要素をもってはいるものの、私たちの奉献を保証してくれる、また、のちの生活の魅力はあまりにも強く、すでにこの世にいる今からその生活に与りたいと望むということを、みなさんは身をもって教えてくださっているのです。

　観想生活を送るシスター方の場合、この点はさらに一層あきらかであると言えます。みなさんが祈りと償いの生活を自由に選んだという事実は、世を驚かせ、引きつけ、また、いらいらさせることでしょうが、決して無関心を装わせることはありません。活動生活を送っているシスターの場合も、みなさんが一生をささげた御方を人々がすぐに認めることができるのに役立っていることは確かです。

3　みなさんが教会でなさる奉仕や使徒職の数々を鼓舞するのは、無私の愛であります。みなさんは周囲の人々に仕えたいと思っておられる。多くの修道会は、最も貧しい人々やひどく健康を害している人、〈非生産的〉として社会から疎外されている人々を、ためらうことなく世話してくださっています。このような人々へのみなさんの愛こそ、人間の命とはいついかなるときも愛され、尊敬されるべきであることの証拠です。キリストが人間を愛されたゆえ、これは当然のことではありますが……。

　以上のことは、わが身を惜しまず、子供、若者、大人が信仰を受け入れることができるよう尽力している人々についても言えることです。(…)

4　修道誓願のおかげで、みなさんの献身は可能になる。従順は他人に役立つ生活を可能にし、清貧はあなたを無私な人間にする。そして貞潔は所有関係から解き放ってくれる。

　献身生活の中心は、毎日、修道院の聖堂で受け、あるいは礼拝するご聖体であります。観想的祈りと使徒職や愛の奉仕が栄養を得るのはご聖体の秘跡からです。聖霊がミサのささげものをキリストの御体と御血に変えてくださいますが、同じ聖霊はみなさんを主の栄光のためのそなえもの、自由な贈りものに変えてくださるはずです。

　たしかにみなさんの活動は教会のためにすばらしい実を結んでいます。最も実りの多い活動と言えるかもしれません。しかし、そのような成功を求めてはなりません。たとえ使徒職であっても決して成功を求める活動となってはならないのです。成功は、あとについて来るものです。聖母マリアのように、ベルナデッタのように、愛がすべてであることを忘れないでください。ベルナデッタの修道生活は健康という面から見るかぎり、みじめであり、無益であったと言えます。しかし、彼女が残してくれた証言はとくに強力かつ明らかであります。

　私がみなさんにお願いしたいこともこれです。みなさんに心から祝福を送ります。病に伏すシスター、ここにおいでになることのできなかったシスター方みなに祝福を送ります。キリストの平安とよろこびのうちに。

信仰とは、神の啓示に対する人間の応答

信仰と道徳シリーズV

1　現在のカテケージスにとって、第一の、基本的な参照事項は、広く知られているキリスト教の信仰宣言です。これはまた、symbols of faith「信経」とも呼ばれています。ギリシャ語のsymbolon（シンボロン）は、承認の印（しるし）として差し出される割られたものの半分（たとえば証印の半分のようなもの）という意味でした。切り離されていた部分を一つに合わせることによって、それを携帯している者の身元を証明したわけです。「信経」の次にあげる意味――身元の証明、信任の証、また、symbolonを証明として用いる約定あるいは契約という意味――は、ここから来ています。この意味から、発表され文書で証明されたことがらの集積とか要約という意味へと移行したのは、ごく自然なことです。私たちの場合、「信経」は主たる信仰の真理、つまり教会が信じている事柄を集めたものです。組織立ったカテケージスには、教会が信じるもの、すなわちキリスト教信仰の内容に関する教えが含まれてい

説教・講話・書簡等の抄訳

ます。それゆえ、「信経」はカテケージスの第一の、そして基本的な参照事項であるというのです。

信　経

2　様々な古代の信経の中で最も権威のあるのが、起源のもっとも古くよく唱えられる「使徒信経」です。そこには、イエズス・キリストの十二使徒によって伝えられた教えの主要な真理が含まれています。もう一つの有名な古代の信経は「ニケア・コンスタンチノープル」信経で、これも同じ使徒伝承の信仰の真理を含んでいます。それらは、ニケア（325年）とコンスタンチノープル（381年）で開かれた、最初の二回の普遍公会議において正式に解説されたものです。教会の公会議の結果として信経が布告されるならわしは、今世紀において再び始められました。実際、第二バチカン公会議の後パウロ六世は、「神の民のクレド」（1968年）として知られている信仰宣言を布告されています。これには信仰の真理を総合したものが含まれていますが、特に、この公会議で示された内容、あるいは最近、疑問が起こってきた点を考慮に入れて書かれています。

信経は現在のカテケージスの主要な原典です。けれどもさかのぼってみれば、信経とは、聖書と使徒承伝から成り立っている「神のおことばという遺産」の総合物であり、その簡潔な要約にすぎません。ですから信仰宣言を通じて私たちも、何世紀にもわたり教会が聖霊の助けをうけ、加えてきた解釈に導かれて、あの不変の「遺産」にまでさかのぼろうとするのです。

「私は信じます」の意味

3　上にあげた信経はいずれも、「私は信じます」という言葉で始まっています。実にそのいずれもが、教えだけではなく、宣言としても役立っているのです。この宣言の内容はキリスト教信仰の真理です。それらすべてが、「私は信じます」というこの最初の言葉に根ざしています。そして、私たちがこの最初のカテケージスにおいて注目したいと思うのは、まさにこの「私は信じます」という表現なのです。

この表現は、宗教的内容、特にキリスト教の内容と全然関係がなくとも、日常の会話に使われます。「私はあなたを信じます」とは、私はあなたを信用します、私はあなたが事実を言っていることを確信しています、という意味です。「私はあなたの言っていることを信じます」とは、あなたの言葉の内容が客観的事実と符合することを私は確信しています、という意味です。

「信じる」という言葉のこの普通の用法において、本質的な要素がいくつか明らかになっています。「信じる」とは、話された内容、つまり相手（相手は一人ではないかもしれませんが）の言葉の内容を、その人（あるいはその人たち）の真実性ゆえに、真実であり、事実に符合するものとして、受け入れ、認めるという意味です。この真実性が、ある特定の場合において、その人に特別の権威、つまり「真理の権威」を与えます。従って、「私は信じます」と言うことによって、私たちは同時に二つのこと――その人とその人の述べる真理――に言及しているわけです。そして真理に言及するとは、その人が特別に信用できる人であると考えた上でのことなのです。

聖書が教える意味

4　「私は信じます」という言葉は、福音書と聖書全体によく出てきます。聖書による「信じる」とはどういう意味であるかを理解するために、新旧両約聖書の事項をすべて比較し分析することは、大変役に立つことだと思われます。「信じる」と並んで「信仰」という名詞も、聖書全体の中心的表現の一つです。信仰のある種の「定義」さえ見うけられます。たとえば、「信仰は希望するものの保証であり、見えないものの証拠である。」（ヘブライ11・1）

これらの聖書資料は、キリスト教二千年の歴史を通して教父や神学者たちによって研究され、説明され、深められてきました。これは、私たちが自由に使うことのできる厖大（ぼうだい）な聖書解釈や教理に関する文献によって証明されています。「信経」においても、「信じること」、「信仰」は、最も大切なポイントです。それはまた、神の啓示に答える最初の行為として、カテケージスの出発点でもあるのです。

5　この集いではただ一つの出典に限っていますが、この出典は、それでも他のすべての出典をふくんでいます。それは第二バチカン公会議の『神の啓示に関する教義憲章』（Dei Verbum）です。そこには次のように書かれています。

「神は、その愛と英知によって、自分を啓示し、また、託身のみことばなるキリストにより、聖霊において、人々を父に近づかせ、神性にあずからせる（エフェゾ2・18、ペトロ②1・4参照）み旨の秘義（エフェゾ1・9参照）を明らかにしようとした。」（『神の啓示に関する教義憲章』2）

「啓示する神に対しては『信仰の服従』（ローマ16・26、ローマ1・5、コリント②10・5～6参照）を示す必要がある。これによって、人間は『啓示する神に対して、知性と意志の全き奉献』（第一バチカン公会議、『カトリック信仰に関する教義憲章』）をなし、また神から与えられた啓示に自発的に同意して、自由におのれをまったく神にゆだねるのである。」（『神の啓示に関する教義憲章』5）

公会議の布告したこれらの文献には「『信じる』とはどういう意味か」という疑問に対する答えが含まれています。その説明は簡潔ですが、大変豊富な内容を含んでいるのです。従って私たちは、いわゆる学術上の定義に匹敵する重要性をもっている公会議によるこの説明に、もっと深く入りこまなければならないでしょう。

まず、一つのことが明らかになってきます。それは、信者の「私は信じます」と、「啓示」と呼ばれる神ご自身のあのイニシアティヴとの間に、語源的、発生的つながりがあるということです。

ですから「信経」（信仰）に関するカテケージスは、神の啓示に関するカテケージスと共に成し遂げられなければなりません。論理的にも時間的にも、啓示が信仰に先行します。信仰は啓示の限定をうけています。信仰とは、神の啓示に対する人間の応答なのです。

というわけで、この応答は可能であり、また応答しなければならない、と私たちは考えます。なぜなら神は信頼できる御方であるから。神ほど信頼できる御方はいません。神ほど真実の権威をもっている御方はおいでになりません。神への信仰ほど、人間のよく使う「私は信じます」、「私はあなたを信じます」という言葉が概念的にも語源的にもぴったりとあてはまる例は外にありません。

不変の教え

国際青年年にあたって
永遠の生命についてたずねる勇気を

価値ある人生、有意義な一生を送るためにはどうすればよいのだろう。この誠実な質問は、福音書のあの青年によると、次のような問いかけになりました。「永遠の生命をうけるために、私はどうすればよいのでしょう。」このようなたずね方はいまも現代人に理解できるのでしょうか。私たちは、この世とこの世の進歩という面からだけしかものごとを見なくなったのではないでしょうか。まず、この世の尺度で考えようとする。もしこの世界を越えようとすれば、宇宙衛星を打ち上げ、他の惑星に信号を送り、その方向に宇宙探索ロケットを打ち上げる。

こういったことが現代文明の内容となりました。科学と技術は前例のないほど、人間の物質に対してあらゆる可能性を生み出し、また、人の思考、能力、性癖、情念といった内面的な分野さえ、支配することに成功しています。

しかし、それにもかかわらず、親しい友人として青春の問いかけに耳を傾けてくださるキリストのみ前にでると、私たちはあの青年のように問いかけざるをえません。「永遠の生命をうけるために、私はどうすればよいのでしょうか。」人生の価値や意味を問う他のどんな質問も、キリストの前では全く空しく、的はずれにすぎません。

なぜならキリストは、人生の道案内をする「よい先生」であるばかりでなく、私たちが神ご自身のうちにもっている最終的な運命の証人なのですから。キリストは、人間の不死性の証人です。キリストが宣言された福音は、過ぎ越しの神秘における十字架と復活によって、確実に保証されています。「死者の中からよみがえられたキリストは、もう死ぬことがない。彼に対して、もはや死は、何の力も持っていない。」(ローマ6・9)　死の壁を越えさせてくれないような計画ならいずれをとっても、キリストは不朽の「逆らいのしるし」(ルカ2・34)と見えるでしょう。実際、死にあたっては、人生の価値と意味を問う質問は口にされません。これらの計画すべて、また、様々な世界観やイデオロギーに対して、キリストはたえず「私は復活であり、生命である」(ヨハネ11・25)と繰り返しおおせられます。

ですから、みなさんがキリストに語り、キリストの真理の証言をすべて受け容れるつもりなら、まず、一つに「この世を愛する」必要がある。神は「御独り子をお与えになるほどこの世を愛された」(ヨハネ3・16)からです。しかしまた同時に、「この世」を飾る富や、きらびやかな現実から離脱した心をもたねばなりません。永遠の生命についてたずねる覚悟ができていなければならないのです。そうでなければ、「この世のすがたは過ぎ去るもの」ゆえ、(コリント①7・31)その過ぎ去るものの奴隷になってしまいます。人は、この物質の世界に生を受けたときから死ぬ日を前にしています。しかし、自分以外に存在の原因をもつ人間はまた、同時に、この世を越えさせる大切なものをも内に秘めているのです。

この世に根ざした人間がこの世を越えさせてくれる何かを内に秘めていることは、もともと人性に刻まれている神のかたどりと似姿によって説明できます。そして、人にこの世を越えさせるものが備わっているということは、永遠の生命についての質問を可能にするだけでなく、その問いかけをさけて通ることをできなくさせます。これこそ、キリスト教の世界に限らず、すべての人がずっと自己に問い続けてきた問題です。みなさんも福音書の青年と同じように、勇気を出して問いかけてください。キリストによると、神の王国、永遠の生命という点からこの世のものをみなければなりません。永遠の生命がないとすれば、この世がいかに豊かで、すべての面でいかに高度に発達したとしても、その果ては死、避けえない死であります。

今のところ、青春と死は対立するようです。青春からみると、死は、遠く離れたところにあるように思えますし、事実その通りでしょう。青春とは一生についての計画であり、その計画が価値と意味に基づいて練られた計画であるのなら、青春期においても、死についてたずねる必要があります。人類が残してくれた経験は、福音書と同じことを語っています。「人間は、一度だけ死んで、のち審判を受けると定められている。」(ヘブライ9・27)また、キリストはおおせになります。「私は復活であり、生命である。私を信じる人は、死んでも生きる。生きて私を信じる人は、永久に死なない」(ヨハネ11・25～26)と。ですから、福音書の若者のようにキリストにたずねてください。「永遠の生命を受けるために、私はどうすればよいのでしょうか」と。

正午になり、いつもローマの聖ペトロ広場で日曜日毎に行なっているように、マリア様にあいさつを送るときが訪れました。大勢のキリスト信者は日に三度、『お告げの祈り』(復活祭の間は『アレルヤの祈り』)を唱える習慣を守っています。

復活祭の間、私たちは復活されたキリスト、天に昇られたキリスト、宇宙の王である御父の栄光に永遠に結ばれたキリストに、よろこびの声をあげてきました。

聖母と共によろこびをかみしめてきました。マリア様は、キリストを胎内に宿し、御子を世に与え、十字架に至るまでキリストにつき従い、信仰と献身の心で贖いのみわざに与りました。そして今は、心と体ともども、イエズスの栄光に結ばれています。

私たちはマリア様と共にキリストを称えます。そして、天の元后に、私たちのために神にお祈りくださいと願います。聖母と共に、聖霊の助けを祈り求めます。

□今日の使徒たち、つまり十二人の弟子の後継者たちのために。

□教会全体が信仰を深め、福音宣教の力をますます発揮できるように。(…)

十三世紀以来、およそ三五〇〇の礼拝地などのうち、二三〇ヵ所は聖ペトロに捧げられていると知りました。古い時代のものは特にその傾向があるということです。これは、ベルギーの信者が、イエズスのお選びになった使徒、その信仰ゆえに教会の岩と定められた聖ペトロに深い愛をもっていることを示しています。みなさんもペトロの後継者のために祈ってください。

同じ期間に、四六五の教会が聖母マリアにささげられました。ずいぶん昔から、町や村や谷あいに、聖所、礼拝堂、彫像などが、マリアを称えるためにたくさんつくられたのです。(…)

聖母の取り次ぎによって、主がみなさん方を祝福し鼓舞してくださいますように。

(五・十九、ベルギーにて)

アンジェルス・メッセージ

『教皇様の声』　ヨハネ・パウロ二世教皇の説教・書簡・講話などを解説なしにそのまま伝える月刊紙　■毎月十日発行　■定価　一部七十円送料四十円　■一年予約八〇〇円送料五〇〇円　■二十部以上の一括購入なら送料不要

郵便振替
神戸
3-72393